

活動報告 2 特別研究員・客員研究員

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/191

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



梶丸 岳「掛け合い歌の比較研究—即興とやりとりはいかに生み出されるか」

掛け合い歌とは決まった旋律にある程度即興で歌詞をつけて歌を交わしあう芸能である。この芸能では表現の重心が歌詞に置かれるという点に特徴があり、即興でいかに「うまいこと」言いあうかに醍醐味がある。掛け合い歌は世界各地にあり、とりわけ東アジアや東南アジアでは数多く報告されている本研究課題はこうした掛け合い歌それぞれの探究と比較を通じて、掛け合い歌の表現がやりとりのなかでどのように即興で生み出されているのかを明らかにすることを目指すものであった。

これまで私が研究してきたのは中国貴州省で歌われる「山歌」、秋田県で歌われる「掛唄」、そしてラオスで歌われる「カップ・サムヌア」という掛け合い歌である。4月に刊行された『民族音楽学 12 の視点』では山歌と掛唄を事例として取りあげつつ音・声・ことばの関係について概説し、歌には旋律に重点が置かれるものと歌詞に重点がおかれるものがあること、掛け合い歌では旋律が歌詞を入れる「器」のように機能していることを説明した。

5月の口頭発表では、「カップ・サムヌア」がどのようにコンテキストに埋め込まれているのかについて、社会記号論の枠組みを用いて歌詞における指標性を分析することを通じて明らかにした。10月の発表ではこれを参考にしつつ、おもにエスノメソドロジ的な視点から掛唄大会の直会における掛唄の掛け合いが進行しているのかを分析した。

11月と12月の発表ではさらに、掛け合い歌の書かれた歌詞を読むことと歌詞を見ずに歌うことの違いについて、オングのオラリティ/リテラシー論を批判しつつ考察した。ここでは山歌の調査で観察された一場面を事例としながら、フォリーの「レジスター」や「パフォーマンス・アリーナ」といった概念を用いて、文字と歌の関係が歌をささえる価値観によって規定されていることを論じた。

以上は質的側面から掛け合い歌のパフォーマンスを分析する試みであったが、6月に刊行された拙稿では量的手法を用いて、掛唄の「主題」がどのように抽出可能かについて論じた。これについては2017年度に刊行予定の続編でこの方向性に沿った分析によって掛唄の主題がどのように経年変化するかや、どのような主題が共起しやすいかを明らかにする予定である。

今後は以上のような成果を踏まえ、今年度あまりしっかりできなかった現地調査を積極的に行いつつ、さまざまな方向性や手法を試しつつ掛け合い歌のやりとりについて研究を進めていきたい。

◆関連する執筆

- * 2016.04 『民族音楽学 12 の視点』音楽之友社（増野亜子編。4章「音・声・ことば」およびコラム「フィールドワーク」を執筆）
- * 2016.05 『フィールドノート古今東西』古今書院（丹羽朋子・椎野若菜と共編）
- * 2016.06 「掛唄で歌われることはなにか—計量テキスト分析による掛唄の話題抽出の試み」『日本伝統音楽研究』pp.71-86.

◆関連する口頭発表

- * 2016.05.28 「ラオスの掛け合い歌「カップ・サムヌア」におけるコンテキスト—歌のコンテキスト化と記号論的記述」日本文化人類学会第50回大会、南山大学
- * 2016.10.16 「掛唄大会という場—民謡のエスノメソ

ロジー」国立民族学博物館共同研究会「音楽する身体間の相互作用を捉える—ミュージッキングの学際的研究」国立民族学博物館

- * 2016.11.06 「オラリティの可能性—オングを超えて」第67回東洋音楽学会大会、放送大学
- * 2016.12.04 「歌を書くことと歌うこと：中国貴州省の山歌を事例に」東京外大 AA 研共同利用・共同研究課題「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」2016年度第2回研究会、東京外国語大学

◆講義・講座等

- * 2016.07.07 「松坂をたどる」伝音セミナー、京都市立芸術大学

◆資料・現地調査等

- * 2016.09.14-2016.09.15 秋田県横手市にて掛唄現地調査

竹内 直 「日本の戦前・戦中期の民謡に基づく作曲」

報告者は昨年度から、とくに松平頼則（1907-2001）の創作と民謡および日本の伝統音楽の採譜との関わりに焦点を当て、調査・研究を進めている。今年度はそれまでの研究の報告を兼ね、松平頼則の音楽と伝統音楽との関わりについて連続講座D「日本の作曲家を聴く」を開催することができた。二日間の連続講座は、両日とも講義のほかに関連作品を取り上げたコンサートを開催した。研究の内容と実演とを少なからず結びつけることができたのは、本学音楽学部長の大嶋義実教授をはじめ、演奏家の協力があったことである。演奏に携わってくださった方々にこの場を借りて御礼を申し上げたい。松平頼則の創作と民謡や伝統音楽の採譜との結びつきは、これまで論じられておらず、ここからさらに調査・研究を進めていく必要を感じている。次年度は、ここまでの成果を論文として発表すると同時に、研究を深める所存である。また一昨年度から行っている研究に関連した音源制作は、今年度も継続して行った。成果の一部は、次年度中にアルバムとして公表する予定である。

最後に連続講座以外の本研究センター内での活動について報告する。本年度は平成28年度伝音セミナー第6回「日本の作曲家を聴く（その2）～能と日本の現代音楽～」を担当した。伝音セミナーでは能の《葵の上》にもとづく外山道子（1913-2006）、黛敏郎（1929-1997）、湯浅譲二（b.1929）の電子音楽作品を紹介した。この時の伝音セミナーの様子は、12月7日付の大阪日日新聞の「関西の音と人」にも取り上げられた。

◆関連する執筆

- * 2016.09 「映画『密輸船』のプリペアード・ピアノ」日本音楽表現学会編『音楽表現学のフィールド2』東京堂出版、pp.222-237。

◆関連する口頭発表

- * 2017.03.23 “Development of Japanese Art Songs in the late 1920's to 1930's and the Formation of an Art Song Canon”, International Musicological Society 2017 Tokyo, Round Table (RT-II-2: The Art Song and Cultural Identity in the Colonial Settings of East Asia and Australia)、東京藝術大学
- * 2017.03.26 “Development of Japanese Art Songs in the late 1920's to 1930's and the Formation of an Art Song Canon”, シンポジウム「20世紀前半の東アジアとオーストラリアにおける芸術歌曲と音楽の近代」、同志社女子大学

◆講義・講座等

- * 大学院音楽研究科：日本伝統音楽研究 fl・fill、日本伝統音楽研究 fill・flV、音楽学特殊研究 mll・mlV
- * 音楽学部：音楽学特講 m

- * 2016.08.09~10 平成28年度でんおん連続講座D「日本の作曲家を聴く——松平頼則の音楽——」（平成28年度宇流麻学術研究助成基金の助成による）

- * 2016.11 平成28年度伝音セミナー第6回「日本の作曲家を聴く（その2）～能と日本の現代音楽～」

◆資料調査・インタビュー等

- * 2016.06.02~04 上野学園大学図書館資料調査、明治学院大学図書館付属日本近代音楽館資料調査
- * 2016.06.24 研究用音源収録（松平頼則歌曲試演）、京都市立芸術大学講堂
- * 2016.09.15 国立国会図書館関西分館資料調査
- * 2016.09.20~22 国立音楽大学附属図書館資料調査、東京文化会館音楽資料室資料調査
- * 2016.09.21 一柳慧氏インタビュー、東京都渋谷区
- * 2016.09.29 研究用音源収録（日本歌曲試演）、京都市立芸術大学講堂
- * 2016.12.24 明治学院大学図書館付属日本近代音楽館資料調査
- * 2017.03.03 明治学院大学図書館付属日本近代音楽館資料調査

中安 真理 「美術に表された音に関する研究」

報告者は仏教美術における音楽表現を主要なテーマとして研究を継続してきた。本年度はその成果のひとつとして、拙著『箏篳の研究—東アジアの寺院荘厳と絃楽器—』を上梓した。箏篳とはかつて東アジアで広く用いられた絃楽器である。正倉院にあるハープ形の箏篳（残欠）のほかに、コト形の箏篳も文献に記されているが、今に伝わる遺品はない。報告者は美術資料・考古資料・文献資料を博搜し、東アジアの仏教建築の軒先には、かつて、コト形の絃楽器（あるいはそれを象ったもの）が飾りとして懸けられており、それは特に日本において箏篳

と呼ばれていたことを明らかにした。その飾りは、仏教経典が説くところの仏国土で自然と奏でられる音楽を象徴すると考えられ、奈良時代から明治初年まで連綿と存在した。今後も引き続き、主として仏教美術における音の表現について研究を行っていく。

また、上記研究と並行して、文殊菩薩の浄土として古くから信仰を集めた中国五臺山に関する調査を進め、五臺山文殊菩薩像の美術表現について、日本への伝来と流布に焦点を当て、国際学術シンポジウムにおいて口頭発表を行った。

学内での活動としては、平成 28 年度第 8 回伝音セミナー「徳川夢声で聴く小説『宮本武蔵』」を担当し、徳川夢声の朗読による「一乗寺下り松の決闘」「巖流島の決闘」のほか、当時、夢声と人気を二分したという市川八百蔵の朗読による「巖流島の巻」も併せて紹介した。ご協力を賜った関係各位に感謝申し上げます。

◆関連する執筆

- * 2016.07.20 『箏篋の研究—東アジアの寺院荘厳と絃楽器—』 思文閣出版
- * 2016.07.20 「高野山の「箏篋」」『鴨東通信 夏』No.102、思文閣出版、pp.10-11

◆関連する口頭発表

- * 2016.08.26 「日本における五臺山文殊菩薩像の美術表現について」五臺山文殊信仰および能海上師生誕 130 周年国際学術シンポジウム、中国五臺山

◆講義・講座等

- * 2016.04 - 2017.03 日本伝統音楽演習 d I、d II、d III、d IV
- * 2016.04 - 2016.08 高野山大学非常勤講師（密教学特殊講義 J）
- * 2017.02.02 平成 28 年度第 8 回伝音セミナー「徳川夢声で聴く小説『宮本武蔵』」

◆現地調査

- * 2017.03.08 島根県雲南市大東町にて海潮山王寺神楽（県無形民俗文化財）現地調査

大西 秀紀 「SP レコードの書誌的研究」

当該年度は報告者が科研費助成を得て調査研究を進めていた、「東洋蓄音器（オリエントレコード）の社史調査とディスコグラフィの作成」（基盤研究（C）、研究課題番号：24520168、2012年4月1日～2016年3月31日）の成果報告を行った。

東洋蓄音器は明治期の東洋蓄音器商会に始まり、大正期の東洋蓄音器株式会社を経て東洋蓄音器合資会社に至った京都のレコード会社で、ラクダ印オリエントレコードを製造・販売した。本研究では東洋蓄音器の変遷を明らかにし、正規盤オリエントレコード855枚、複写盤オリエント・ウグイスレコード等664枚のディスコグラフィ（音盤目録）を作成した。これにより東洋蓄音器時代のオリエントレコードの内容に関しては、ほぼ網羅出来たと考える。東洋蓄音器合資会社は大正8年12月に日本蓄音器商会に吸収されるが、オリエントレーベルはそのまま昭和7年まで続いた。この日本蓄音器商会時代のオリエントレコードについても、今後継続して調査を行う予定である。

◆関連した執筆

- * 2016.07 「座敷唄収録音源の市販資料一覧」、井澤壽治編『座敷唄集成』、東洋書院
- * 2016.10 「オリエントの謡曲レコード」、『謡を楽しむ文化—京都の謡の風景』、日本伝統音楽研究センター研究報告11、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
- * 2017.03 「歌舞伎音楽のレコード 芝居囃子 忠臣蔵十二ヶ月」、『平成28年版 歌舞伎に携わる演奏家名鑑』、(社) 伝統歌舞伎保存会
- ◆関連した口頭発表
- * 2017.03.10 「京都のレコード会社 東洋蓄音器・オリエントレコードについて」、藝能史研究会3月例会、キャンパスプラザ京都
- * 2017.03.11 「オリエントレコードの成立について」、プロジェクト研究「歴史的音源から見る三味線音楽の旋律型研究」、京都市立芸術大学
- * 2017.03.26 「戦後関西歌舞伎の音源」、大阪芸能懇話会、

難波生涯学習センター

◆講座

- * 2016.05.12 平成28年度第1回伝音セミナー「子供のためのレコード」
〈使用したレコード〉
- 1 ウントコ爺さん 花房静子・天野喜久代 東京蓄 375/376 (大正4年8月発売)
- 2 ウサウサ兎 花房静子・天野喜久代 東京蓄 381/382 (大正4年7月発売)
- 3 正直正吉 作・口演 巖谷小波 ニッポノホン 15015 (大正12年4月発売)
- 4 ドンブラコ 北村季晴・初子、帝国劇場ヲペラ及オケストラ部員 アメリカン 2386-2395 (大正2年8月発売)
- ◆音源監修・提供
- * 2016.05.29 「住太夫の大大阪」、朝日放送ラジオ (21:00～22:00 放送)

神津 武男 「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」

本年度の日本伝統音楽研究センターでの活動は、(1) 山田智恵子先生の研究課題「義太夫節 伝承を失った曲の復元研究とその展開」の研究協力者として参加したこと、(2) 自身が研究代表者を務める研究課題「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」を遂行したこと、の2点である。

(1) の研究課題は、人形浄瑠璃文楽がこんにち伝承を失った演目・場面を、近年新たに所在が判明した史料群（配役書入本）に残る楽譜「三味線譜」を活用することで、国立劇場での文楽公演でも復活されずにきた段・場面の復元を試みる、というものである。山田智恵子先生が研究代表者を務められた科学研究費助成事業・基盤研究(B)「人形浄瑠璃文楽の音楽学的復元上演に関する基礎的研究」（課題番号24320042。2012—15年度）の

成果を引継いで、これを発展させることを主旨として、公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団の研究助成事業の採択を得て進めるものである。筆者は前記・基盤研究(B)で、浄瑠璃本の資料調査とデジタル画像収集の作業に当たったが、(1)の研究課題においても引き続き、浄瑠璃本の資料調査および必要な資料のデジタル撮影を進めて、基礎資料の作成を担当している。来年度の復曲に向けて、山田智恵子先生と太田暁子先生との研究会を進めた。

(2)の研究課題は、日本伝統音楽研究センターの客員研究員として科研費の申請資格を得て、「研究活動スタート支援」の採択を得たものである。近年、新たに人形浄瑠璃関係史料の所在を把握した機関などがあり、あるいは筆者のその後の研究の進展によって、再調査の必要が判明した機関があった。(2)の研究課題では、これらの人形浄瑠璃関係史料の所在調査・書誌研究を進めて、〈「浄瑠璃本」書誌データベース〉と〈「人形浄瑠璃番付」書誌データベース〉の、ふたつのデータベースについて一層の充実と精度を向上させることを目指す。

浄瑠璃本について新たに調査した機関は、滋賀〈1〉、大阪〈2〉、海外〈1〉である(〈〉内は機関数)。特に大阪の1個人は、浄瑠璃本(通し本)だけでも488冊と数える、大規模なコレクションである。従来知られていなかったばかりでなく、内容においても稀少な史料があって、今後目録化して報告したい。

人形浄瑠璃番付について新たに調査した機関は、大阪〈1〉、名古屋〈1〉である。

また筆者は人形浄瑠璃の歴史研究上の史料として、近年、人形浄瑠璃関係者の墓碑調査を進めている。昭和後期まで存在した近世期の石碑が、平成期に進む墓地の〈再整理〉で失われたと知られる場合もあって、墓碑・碑文の記録は急務である、と指摘したい。過去帳でなく、墓碑そのものの記録が必要であるのは、主に台座に刻まれるところの人名の有無が重要であるからで、葬られる当人が建立当時いかなるネットワークの中に生きたのがここからのみ判明するからである。筆者はこれに関連してインターネットのSNS「ツイッター」上で、近世期の太夫を中心に命日忌日にその略歴を述べるのであるが、11月中旬「滋賀県近江八幡市の長命寺参道に「竹本三根太夫」の石碑がある」と、ツイッターのダイレクトメールとしてお知らせいただいた。添付の写真は正面のみで、文字は「俗名竹本三根太夫」と読めたが他面の情報は無かったので、12月14日訪問し実見。裏面の「天保十年己亥冬」、左面の「釈浄峯」は、天保10年(1839)5月大坂での出演記録を最後に「少し病気にて加賀国山中へ入湯に行」「右入湯が当りて大阪に立帰り養生不叶」に没したとのみ伝わる(『増補浄瑠璃大系図』)、5代三根太夫の戒名・没年と推考した。インターネット社会ならではの奇縁、と感慨深く、合掌した。裏面下部の「願主 竹沢駒造・惣連中」の建立と判ったが、竹沢駒造は文政年間のみで天保頃の活動は不明。人形浄瑠璃史の〈根〉に新たな一筋が見出された。

浄瑠璃本・番付・墓碑の所在に関する情報を、御教示賜りますよう、お願い申し上げます。

◆関連する執筆

* 『時雨の炬燵』成立考 ― 三代竹本綱太夫の添削活動について ― (『早稲田大学高等研究所紀要』第9号、早稲田大学高等研究所、2017年所収)。

* 『「摂州合邦社」下の巻の切「合邦内」現行本文の成立時期について ― 二代竹本綱太夫の添削活動について ―』 (『歴史の里』第20号、松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館、2017年所収)。

高橋 葉子 「能の略式演奏の歴史と現在」

平成28年度の日本伝統音楽研究センターでの主な活動は、1. 科学研究費助成事業(基盤研究C)「能の略式演奏の歴史と現在―新しい演出形態を構想するために」(平成28年度開始、平成30年度終了予定。研究分担者藤田隆則。)の研究活動、2. プロジェクト研究「音曲面を中心とする能の演出の進化・多様化」での研究、3. プロジェクト研究「京観世の記録化」(平成24年度終了)報告書の出版である。

1. 能の略式演奏とは、①「素謡」「舞囃子」「一調」等の能の部分演奏、および②臨機に行なわれる省略形の能上演など、“完全形態での能上演”以外の演奏すべてを指す。①は、世阿弥の『申楽談義』に見える本業としての「小謡」から現代の素人の稽古事まで、能の歴史に重要な位置を占めるものであり、近代においては素人愛好家によるこれらの活動が能の存続と発展を支えてきた。②は①とともに歴史的に多様な形式で試みられてきたが、本研究では主に玄人による近現代の省略上演を対象としている。①②を通じ本研究は、完全上演の能に対する「二次的芸術」として従来本格的な学術研究が行われてこなかったこれらの分野を能の歴史に正しく位置付けることを意図し、さらに、能の実践と理念における「省略可能なもの」と「省略不可能なもの」を発展的に捉え直すことにより、能の形態の可能性についての今日的提起を目指すものである。28年度は、京都で数代にわたって一族で能に関わってきた愛好家三組、および多彩な上演経験を持つ玄人一名へのインタビュー調査を分担者とともに行った（6月、7月、11月、29年3月）。また、謡の記譜法は近代の素人愛好家の増大が契機となって整備、体系化されている。その体系化の歴史的研究として、観世流近代謡本における「ウキ」の変遷を調査した。その成果として、過去のヨウ吟の旋律パターンに新たに加えるべき音進行と、その廃絶の経緯、江戸後期から近現代までの「ウ」の用法の変遷を明らかにした。これは2のプロジェクト研究において昨年度発表した「江戸中期観世流の中音域の旋律について」を補訂発展させたものである。

2. 10月定例研究会において、上記の研究「明和改正謡本の節付「ウ」」を発表し、11月の東洋音楽学会大会で発表を行なった。

3. 昨年度から引き続き編集・執筆作業を行っていた報告書『謡を楽しむ文化—京都の謡の風景』を10月に刊行した。上記の研究「明和改正謡本の節付「ウ」」は、当プロジェクトで行った岩井家謡伝書『そなへはた』の研究が基となっている。

新年度は、科研費とプロジェクト相互の研究を連動させながら、各種の演奏形態の歴史研究と、謡の理論化の歴史研究を引き続き進めたい。また玄人および能楽関係者との連携を広げつつ、実践と理念の双方から発展的上演形態の可能性へ向けた研究調査を進めてゆきたい。

◆関連する執筆

- * 2016.06.30 「江戸中期における謡曲音階論の形成—岩井直恒の十段音法を考察する」日本伝統音楽研究センター研究紀要『日本音楽研究』第13号
- * 2016.10.30 『『能囃子心得』解題と翻刻』日本伝統音楽研究センター 研究報告11『謡を楽しむ文化—京都の謡の風景』
- * 2016.10.30 「岩井直恒音曲伝書『あやはとり』解題と翻刻」（大谷節子と共著）同上
- * 2016.10.30 『『そなへはた』を現代語訳する試み—序文、凡例、音の部、吟の部』（藤田隆則、丹羽幸江と共著）同上
- * 2017.03.30 「謡本から見た梅若家と観世喜之家—近代観世流の節付改革」『武蔵野大学能楽資料センター紀要』第28号

◆関連する発表

- * 2016.11.06 東洋音楽学会第67回大会発表「明和改正謡本の節付「ウ」—江戸中期能楽観世流の中音旋律—」

◆講座

- * 2017.03.02 平成28年度第9回伝音セミナー「下掛宝生流の謡を聞く」日本伝統音楽研究センター

◆その他の執筆

- * 2016.08 舞台紹介：《鐵門》—京都観世会「復曲試演の会」『観世』8月号 檜書店
- * 2016.09 報告：【例会ノート】関西例会・第二十四回能楽フォーラム「この人に聞く—新・人間国宝、三島元太郎氏—」『能と狂言』第14号 能楽学会

◆調査活動

- * 成城大学民俗学研究所『浅野太左衛門家旧蔵資料の総合的研究』（研究代表者大谷節子）継続中。
- * 2016.08 「能楽囃子太鼓方観世流に見る伝授と受容の諸相—『入門者摘録』研究」（研究代表者三浦裕子）への協力参加。

◆対外活動

- * 武蔵野大学能楽資料センター 非常勤研究員
- * 京都造形芸術大学芸術学部通信教育部芸術学科 非常勤講師

丹羽 幸江 「祝詞の音楽研究と能の楽譜研究」

1、祝詞の音楽研究

神道の祝詞は、祈りの言葉であるとともに、歌というものの起源と考えられてきた。現在の神社神道では祝詞は言葉として唱えられるのみで、旋律的に歌われることはほとんどない。しかし江戸時代以前には、楽譜記号が記された祝詞も発見されており、音楽的な内容を持つ祝詞もあったと推定されてきた。本研究では、そうした祝詞の楽譜を解説し、こういった「歌」がもっとも古い歌へと繋がっていくのかと考察することを目的とする。

研究の柱は、①これまで報告された祝詞楽譜に加え、新たな祝詞楽譜を発見し、それらを解説すること。②現在の祝詞が唱えられる環境や、その唱えられる背景を明らかにすること。③仏教声明や能といった、祝詞の周辺の芸能から、かつて歌われていた祝詞の音楽を明らかにする、この三点である。

28年度は、①について、これまで先学により報告されてきた祝詞楽譜に加え、天理大学所蔵吉田文庫の大祓祝詞に楽譜記号のある祝詞が複数存在することを調査し、これらの解説を行った。これらの楽譜では一様に能の記譜法が借用されていること、そして記号の一貫性から江戸期から明治にかけての伝承が見られることが明らかになった。能の謡の記譜法が借用された理由について、吉田神道と猿楽者のあいだでの翁伝授という上演裁可状をめぐっての交流があったためと推測した。日本音楽学会第63回全国大会（於中京大学、28年11月）において口頭発表を行い、昭和音楽大学紀要36号（29年3月）に論文の執筆を行った。

②の祝詞を唱えることの意義に関しては、現在の神社神道において唱えられる祝詞の音楽面での伝承のあり方は、天皇による非公開の祝詞を、神職が仰ぐべき規範としている。このため、祝詞の音楽的技法に関する訓練が行われているにもかかわらず、言説が存在しないという伝承の構造を明らかにした。International Council for Traditional Music, MEA Symposiumにおいて（於台北中央研究院、台湾、28年8月）口頭発表を行った。

③に関しては、声明のなかでも日本語の語り物的要素を持つ講式は、祝詞から影響を受けたことが岩原諦信により指摘されてきた。このため、本学修士過程学生の僧侶、吉岡倫裕氏より、真言宗南山進流の四座講式について、楽譜の読み方・唱え方の伝承を受けた。29年度には成果をまとめ、口頭発表を行う予定である。また、能の番組の一部で【ノット】という宗教者が祝詞を唱える小段がある。これらの調査を行い、29年度には論文執筆予定である。

2、能の楽譜研究

まず、プロジェクト研究「京観世の記録化」の成果物である『謡を楽しむ文化』の編集に加えていただき、編集作業のお手伝いをさせていただいた。研究会メンバーの力作が揃い、無事10月に出版の運びとなった。

次に室町末期の能の楽譜研究として、室町末期以降の上演記録がなく、現在廃曲となっている《伏木曾我》の復曲上演に参加し、節付の復曲にたずさわった。（湘南ひらつか能狂言、第6回にて上演）

《伏木曾我》には様々な伝本があるが、東京大学史料編纂所所蔵の観世元頼本を底本とし、復曲を行った。室町末期の謡本の記譜法は未解明な部分が多いものの、そのなかでも観世元頼の節付は、記号の質量ともに優れており、胡麻の向きなどの楽譜記号を損なわないよう忠実な復曲に努めた。復曲の結果は、能楽師加藤眞悟氏を中心とする平塚市文化財団主催の能楽公演での上演のための謡本として出版された。

◆関連する執筆

- * 2016.10 『謡を楽しむ文化 -- 京観世とその周辺』（藤田隆則・高橋葉子・丹羽幸江編）京都市立芸術大学。
- * 2016.10 論文『「そなへはた」現代語訳』（藤田隆則・丹羽幸江・高橋葉子）、『謡を楽しむ文化 -- 京観世とその周

辺』、pp.127-154。

- * 2016.11 謡本『復曲《伏木曾我》』伏木曾我復曲検討会（加藤眞悟、丹羽幸江、伊海孝充）、檜書店。
- * 2016.03 論文「大祓祝詞の楽譜」昭和音楽大学研究紀要36号、pp.6-16。

◆関連する口頭発表

- * 2016.08 “Standard Methods of Chanting Shinto Ritual Prayers” International Council for Traditional Music, MEA Symposium, 台北中央研究院、台湾。
- * 2016.11 「吉田文庫の大祓祝詞の楽譜」日本音楽学会第

63 回全国大会、中京大学。

- ◆上演プロデュース、口述活動
- * 2016.11.26 湘南ひらつか能狂言第 6 回「伏木曾我」節付復曲担当、および当日の解説。

前島 美保「歌舞伎囃子に関する劇書・伝書の研究」

本研究は、歌舞伎囃子に関する劇書や伝書の史料研究を通して、近世から近代にかけての伝承のあり方を考察することを目的としており、2016 年度より科学研究費基盤 (C) の助成を受け研究を進めている。これは日本学術振興会特別研究員の研究課題「上方歌舞伎の音楽演出に関する総合的研究」の一部をなすものでもあるが、とくに本研究と関連する活動について、以下報告する。

①『芝居囃子日記』に関する調査・研究

本研究は、近世から近代にかけての歌舞伎囃子を伝える「劇書」と「伝書」という二つの史料群を包括的に調査・収集し、既出史料の見直しと新出史料の検討を通じて、歌舞伎囃子の史料研究の基盤を整備することを目的とする。

今年度は、まず『芝居囃子日記』の研究史の把握と諸本調査、および周辺史料の調査・検討を集中的に行った。六代目田中伝左衛門『芝居囃子日記』は原本が伝存せず、二系統の写本によって伝えられている。とくに大正十三年 (1924 年) に模写された町田本 (町田佳聲旧蔵本) は現存諸本の中でも最善本として知られ、これを西山松之助が筆写したものが『日本庶民文化史料集成』第六巻 (1973 年) に活字翻刻化されるなど影響力が大きい。この町田本が東京文化財研究所に所蔵されていることが判明し、この度改めて調査・翻刻・検討した。その結果、音楽内容に関わる部分で町田本と活字本との異同が散見された。また『日本庶民文化史料集成』の解題に記された『芝居囃子日記』の諸本のうち、黒木本や高野本は現存不明であることが旧蔵機関などへの照会でわかったほか、解題の諸本系譜には記されていない杵屋本を底本とする翻刻が、雑誌『長唄』(長唄書院、1933 年 11 月～1934 年 6 月) に部分掲載されていることも確認した。以上の調査研究は、研究分担者 (土田牧子) や大学院生と定期的に研究会を開催して行い、その成果の一部は、東洋音楽学会第 67 回大会にて口頭発表した (前島美保・土田牧子・鎌田紗弓・木岡史明「『芝居囃子日記』再検」)。

②上方歌舞伎囃子方旧蔵資料の調査・整理

昨年度発掘した昭和期上方歌舞伎で活躍した長唄唄方杵屋胡金吾 (1924～2009) の遺品資料を調査した。全 137 点の資料は主に唄本や写真、音声資料 (オープンリール、カセットテープ) から成り、とくに音声資料は自らノートに整理して保管し、再編集するなど大事にしていた様子が窺われた。オープンリールの内容確認と整理には時間を要しており、全デジタル化には及ばなかったが、再生できたものの中には胡金吾はじめ、杵屋富造、中村美秋、実父阪東徳寿郎など昭和の上方の囃子方の演奏を聴き確かめることができた (竹内有一・前島美保「昭和の関西歌舞伎の音楽を聴く」、平成 28 年度前期伝音セミナー第 4 回にて口頭発表)。一方、明治後期の長唄の名人阪東小三郎 (1846～1907) の脇を勤めた唄方で、主に明治から大正期にかけて上方歌舞伎で活躍した阪東亀寿の旧蔵唄本を入手し、調査した (「長唄唄方阪東亀寿旧蔵史料について」、東洋音楽学会東日本支部第 94 回定例研究会にて口頭発表)。61 点の亀寿自筆の唄本類からは、当時黒御簾で使用されていた唄を一覧できるほか、初代市川右團次や初代中村鴈治郎ばかりでなく、女役者や上方舞の地方をもつとめるなど、近代上方の囃子方の活動範囲、曲のレパートリー、交友関係等を具体的に窺い知ることができる。今後も胡金吾と亀寿の旧蔵資料について考察を深め、近いうちにまとめたい。

◆関連する執筆

- * 2017.02 論考「演奏家でたどる近代の上方歌舞伎の音楽」、「文献資料一覧」、「平成 28 年度歌舞伎に携わる演奏家名鑑」、社団法人伝統歌舞伎保存会
- * 2017.03 報告「丹生の太鼓踊りの拍子一伝承と歌本一」、『丹生太鼓踊り調査報告書』

◆関連する講座、発表等

- * 2016.08.04 竹内有一・前島美保「昭和の関西歌舞伎の

音楽を聴く」、平成 28 年度前期伝音セミナー第 4 回、日本伝統音楽研究センター

- * 2016.11.06 前島美保・土田牧子・鎌田紗弓・木岡史明「『芝居囃子日記』再検」、東洋音楽学会第 67 回大会、放送大学
- * 2017.02.04 「長唄唄方阪東亀寿旧蔵史料について」、東洋音楽学会東日本支部第 94 回定例研究会、共立女子大学